

INCUNABULA

インキュナブラ



Grasshouse

『インキュナブラ』序 及び、作者「シビラE」のこと

(編者・代

理人より)

.....たしか1990年代前半のある年、肌寒い晩春だったと思う。

東京都内の片隅でひっそりと営まれているわれわれの文学結社に、董色の封筒に入れられた分厚い原稿が送られてきた。

原稿は手書きであり、神経症的に薄い震えるような青い文字で書かれてあった。奇妙なことに、文字は青鉛筆、青いボールペン、ときに紫色の色鉛筆で描かれている。ほとんどは青い色鉛筆で薄く書かれたきわめて読みにくい原稿だった。

差出人は「シビラE」と称する正体不明の人物で、十代の少女だという。

しかし実際のところは、自己紹介としての具体的な生年月日も性別も書かれていない。いわゆる「なりすまし」の可能性もあるし、ひょっとしたら、少女のふりをした、くたびれた中年男かも知れない。記されている住所からは、北関東圏のある地方都市に住んでいることだけがわかった。

『インキュナブラ』というタイトルのその作品は、どうやら短編集のようであり、「廃屋のシェヘラザード」を自称する主人公の少女が、大人たちを避けて、森の奥の見捨てられた山荘に閉じこもり、白痴の美少年「洋市」に語る物語の集合体だというのである。

サブタイトルに「終末の子供たち」と書かれてあった。

そのシェヘラザードとは、どうやらシビラE自身のことらしい。そもそも『インキュナブラ』という聞き慣れないタイトルだが、手っ取り早いのでいまウィキペディア（確か原稿を受けた当時は、まだこんなものはなかったと思う）を検索してみると、

「インキュナブラ (incunabula) は、西欧で作られた最初期の活字印刷物のことであり、15世紀（グーテンベルク聖書以降、1500年まで）に活版印刷術を用いて印刷されたものを指す。揺籃印刷本、インクナブラともいう (incunabula はラテン語でゆりかごの意味)」とある。

中世からルネッサンスにかけての「本のゆりかご」「揺籃印刷本」だそうである。孵化、培養、潜伏を意味するインキュベーションなどの言葉はこの同類らしい。

私は、ゆりかごという言葉が気になった。

その日、私は不審に思いながらもその原稿を一晩持ち帰り、一読してみた。

手書きの文字が読みづらいので、明け方までかかった。金星の光る寒々とした紫色の空を眺めながら、私はコーヒーカップを片手に、大きく溜息をついた。

それは奇妙な読後感だった。

ひとつひとつの物語は、主人公の語る脈絡のない物語、幻想的な奇譚の類であり、それぞれの話は連続してはいない。つまり作者は一体何が主張したのか、いっこうに分からないのだ。それは小説というよりは、むしろ統合失調症の人間の手になる奇妙な手記や雑稿であり、作者は近代

小説の骨法も理解していないようであった。

そもそも語り手そのものが、一人称になったり、三人称になったりと、混乱をきわめたテキスト群なのである。しかも、数十枚の中編もあれば、わずか数行で終わっている掌編もある。

この作者は、構成という概念がまるでない。

かのアラビアンナイト『千夜一夜物語』、あるいは中国の怪異譚『聊齋志異』のパロディを狙っているのか。詩的な文体と、怖ろしく生硬な論文まがいの文章とのぎくしゃくした混淆体。

形式上の冒険といえはいえないこともないものの、他にどんな意図があるのか、作者が眼前に姿を現さないで、その全体像がつかめない。

おそらくは合評会などでも、いかにも「頭だけでこさえたツクリモノ」と一刀両断されてしまいそうな作風だ。(日本の同人誌ギルドに棲息する古い文学老人にはこの手の輩がいまだに多い)

先程のウィキペディアの解説に何かヒントがあるかも知れない。

「(インキュナブラには)キリスト教関係の本や人文主義者の著作などがある。中には装飾写本を模して手書きで彩色をほどこしたものもある。なお、フィレンツェで最も数多く出版されたのは、15世紀末のサヴォナローラの説教であった。(中略)ヨーロッパの歴史ある図書館では、インキュナブラの所蔵数で歴史的価値が判定され、また、古書蒐集家はインキュナブラを何冊持っているかを競うことがある。」

しかし、この青い引っ掻き傷のような文字で埋められた生原稿にざっと目を通す限り、むろんサヴォナローラのような深遠な思想は見当たらない。

そんなこんなで、他の同人達と検討した結果、掲載見送りとの答えが出た。

しかしその旨をハガキで伝えても(シビラEは電話、携帯、メールを使わなかった)、一向に意に介さず、再度原稿を送りつけてくる。

その断続的なやりとりが確か2000年まで続いたと思う。

彼女の原稿は判読しがたいものも含めて、事務所の片隅の段ボールにうず高く積もっていった。その原稿の束は、パラノイアの独り言のような妖気を放っていた。

――その送付がある時点で、ぴたりと止んだ。

しばらくはそのことにすら気がつかないままであった。

そのうち私達は『インキュナブラ』に興味をなくし、仕事や雑事や会合や、日々のあれこれにかまけて、シビラEの原稿の山をほったらかしにしておいた。

あるとき、誰ともなく、「あの青鉛筆のシビラEは死んだのかも知れない」というようなことを囁き始めた。

見捨てられたような北関東の地方都市の森の廃屋で、自らの妄想に身を焼きながら、物語の精霊として孤独に死んでいった少女の幻影が脳裡を離れなかった。ひょっとして、世を呪って自殺したのではあるまいか。私はそれを聞いて薄気味悪くなってきた。

ところが二十一世紀を迎えてから(.....凄い言葉だ)再び、あのシビラEから厚い原稿が送られてきた。

それは案の定、針金のような文字で綴られた『インキュナブラ』の続編であった。

この原稿でまたしても「廃屋のシェヘラザード」はとりとめもない物語を、シャーリアール王ならぬ、知恵遅れの美少年に語っているのだ。

しかも、いつも無愛想な彼女は、今回に限って手紙を添付してきている。

「私はシビラE。廃屋のシェヘラザード」

という奇妙な呪文のような書き出しで、その手紙は始まっていた。

「私と洋市は、二十一世紀を迎えられない。誰もいない森の廃屋の中、時空の歪の中で、エーテルの内壁に爪を立てて血を流しています。私はもはや、自分の物語の空間を生きるしかこの世に居場所がなくなってしまった。虚無の時空の渦をめぐる悪夢の泡たちが、ほつれあいながら暗い林を青白い鬼火のように通り抜けてゆきます」

こんな独り言のような文体で手紙は書かれてあった。ここに出てくる「私」はもちろん、書き手を意味しているらしい。

しかしすでにわれわれの住んでいる通常世界は、二つの世紀をまたいでしまっている。テロやら不況やら、現実の国際社会も大きく変動しようとしていた。

ところが彼女は、謎の廃屋に潜む自分たちだけが二つの世紀間の「時間の峡谷」に落ちて、薄闇の底でもがいているというのだ。一体どういった時空の観念なのだろう。成長を拒絶した少女の悪夢なのか、それとも単なるはったりなのか。

というわけでシビラE狂気説が、われわれの間では定着してしまった。どうやら皆、彼女のことはもう触れたくないといった雰囲気だった。それに単純に原稿の体裁からしても、そもそもが連作集という形式であり、掲載しづらいのである。

ところがそこに、予期せぬ支持者が現れた。

三年ほど英国に行っていたK女史が東京に戻ってきたのだ。年下のイギリス人との結婚生活がうまくいってないらしいことは、何となく最近のメール連絡で察しがついていた。

それは花々や青芽の匂いの混じった風が、そろそろ吹き始める物憂い季節だった。

二両編成の世田谷線の発着が臨める鄙びたビルの二階の事務所で、われわれはいつものようにとりとめのない話し合いの時間を持った。

下の階は中東系エスニックレストランになっているので、窓を開けると風向きによっては強い香辛料の匂いが漂ってくる。

「また例の自称シェヘラザードが、原稿を送ってきているね」

「ああ、なぜいつも青鉛筆なんだ。それでなくても手書きの文字は読みにくいのに」

「この筆致、精神を病んでいるのではないかな、この作者は」

ソファに身を沈め、タバコをふかしながら同人たちは話し込んだ。

一人は批評家肌のボルヘス愛好家、もう一人はドストエフスキー崇拝者、そして他の一人は私小説原理主義者、そしてK女史だった。

「この青い文字に対する執着。なにか、精神の崩壊過程を暗示してるんじゃないかな」

「気ままな空想を綴っているだけだ、これは。小説といえるものじゃない」

「でも、ところどころ、ちょっと立ちどまらせるような変なイメージがあるわ」

K女史がつぶやいた。微妙な空気だった。

「童話やお伽噺、アニメみたいなところもある。浅薄だな」と私小説原理主義者。

「なんだかどこかの病院に長いこと入院中で、閉鎖的な環境にあるんじゃないの。その、べつに、精神病という意味ではないけれど」

これは私のなりの推測だった。

「こんなの、ただの荒唐無稽なホラ話ですよ、所詮。少なくとも、純文学とはいえないね」

ボルヘス狂がいう。この種の作品、幻想奇譚やエッセイ・ストーリーの類に最も寛大だと思われる彼が、いちばん手厳しかったのはどういうわけだろう。

土曜日の夕方であった。

下のレストランの香辛料の匂いが幽かに漂っていた。

「あんたたちって、頭カタイいのねえ」

さっきからK女史は、いささか苛立っているようだった。

「小説って、身につまされるようなものでないといけないわけ？ クドクドと無目的に、心理分析ばかりしているような。最近ウチの同人誌に掲載された作品、どうよ。介護小説だの、失業してハローワークに並んだだの、カルチャーセンターでの講師と不倫しただの。前号に載った作品だって、ひどいものだわ。マンションの一室に引き籠もり、一年間何も事が起こらず猫と語り合うだけの毎日が続いて、ラストでは結局、主人公のネットオタクが猫を殺したあげく、自分も自殺する話。読む前から予測がつくようなのばかりじゃないの。もう、うんざりだわ。」

「悪かったな。それは、俺の作品だよ」

私小説原理主義者が、押し殺したような声でいった。「そんなにいうなら、向こうでのお前さんの壊れた結婚生活、赤裸々に書いてみせたらどうなんだ」

「うるさいわねえ！ 余計なお世話よ。……あのねえ、素朴な実感主義者さん。身につまされるだの、されないだの。それで一体どうなのよ。それが純文学なわけ？ そんなのが時代のリアリティ？ どうして物語であってはいけないの。一般的な物語に回収されないような物語ならば、それでいいのではないのかしら」

それを聞いて、ボルヘス狂が口を挟んだ。

「しかし君、ドン・キホーテ以来、近代小説というものはねえ……」

「ばーか！」彼女は思い切り鼻に皺を作った。

「それじゃ、提案。この暗い、暗～いお伽噺、私が文字起こしするから、紙媒体の雑誌ではなく、ネットに載せるといのはどうかしら」

K女史の謎めいた文学論はよくわからなかったが、こんなふうに強く言い張るので、われわれは同意することにした。あとあとまで尾を引いて面倒臭いのだ。それにK女史は詩も書いているので多少他の者とは感覚が違うらしい。

「そこまでいうなら、君はフローベールを、一体どう思うのかね。つまりだな、マダム・ボヴァリーと作者との関係性について、僕はいつてるわけなのだが」

批評家肌のボルヘス狂はしつこかった。

「くそッ。この屈辱を、そのまま一言一句もらさず、赤裸々に小説に書いてやる」

私小説原理主義者は、押し殺したように下唇を噛みしめた。

「……まあまあまあ、もう、いいから。そろそろ下に移動しよう」

ことなかれ主義と中庸の人を持って任ずる私は、間に入った。

少なくとも『インキュナブラ』という鬼っ子は、支持者を一人獲得したようだ。

われわれは打ち合わせの後、階段を下りて一階の多国籍料理レストランにしけ込んだ。

羊肉を頬張りながら、国際色豊かなビールの小瓶を並べ、ひとごちすると、再びシビラEの話を蒸し返した。なんだかんだいいながら、妙に気になっているわけだ。

この中近東ふうの怪しげな店は、水パイプもやっけていて、窓際を埋めた青や緑の水瓶ふうのガラス瓶が、照明の光を透かして美しい。金色の縁取られた装飾部分がきらきら輝き、並んだ瓶たちはペルシャの街の階段迷路を歩む貴婦人の優雅な柳腰のように思えてくる。

どうやら私も、終末の不健康なアラビアン・ナイトに誘われているようだ。この自称「少女」は潜在意識を刺激する書き手ではあるらしい。

*

そうこうしているうちに、何度かの連絡の試みのあと、とうとうシビラEは、われわれと会うことを承諾した。場所は、原宿神宮前の住宅街の裏手にある喫茶店で、K女史が同行した。かつてシビラEが中退したデザイン学校の近くなので、地理が分かりやすいというのである。

指定の店に入ると、壁際に黒眼鏡の痩せた女性が座っていた。

全身黒の服装で髪は長く、盲人のように杖を突いている。鼻は尖っていて、眉間に険しい皺があり、どこか凍りつくような気配があった。かすかに不幸の気配がした。年齢は、三十代半ばぐらいだろうか。

さすがに私はぎょっとした。

確かにあの作品は、十代の少女の空想とは思えないニヒリズムや、人生と存在への疲労感、どこまでが本当か分からないような妙ちくりんな雑学が混在している。とすると、これがおそらく現実なのだ。

まさかと思いつつ、念のために尋ねてみた。

「すみません。ひょっとして貴女は、シビラEさんではないでしょうか」

尼僧とも魔女ともつかないその女は、何もいわずに私を見返すと、無言で首を振った。

私はほっとした。本人であつたらそれなりにショックだったかも知れない。きっと、あの青鉛筆の原稿の放つ病的で不吉な感覚が、黒い喪服のような死の気配を醸し出していたのだ。

私は安堵して、踵を返した。一仕事した気分だった。

ところが帰り際、奇妙な黒と白との服装をした痩せた少女と目が合った。さっきまでここには誰も座ってはいなかったはずだ。私を見上げ、驚いたように目を見開いた。

色白で優雅だが、どこか退廃の色を帯び、北欧の娘のような雰囲気を持っていた。美しい顔立ちなのだが、その瞳は病的でとげとげしく、私は路上に打ち捨てられた人形を連想した。

しかし私はそのまま、ドアを開いた。

なぜあの時、私はうろたえたのだろう。いや、彼女の持つ他者への脅えが、まるで静電気のように、瞬間的にこちらに感染したようにも思える。

いま考えると、あの痩せたひよわなフランス人形のような少女こそが、シビラEだったのかも知れない。これは後付けでいうのだが、彼女の目の中に、私がすでに社会人としての贗のペルソナの下に何とか隠蔽に成功した、怖れと不安の色を直覚したのかも知れない。

「おかしいわね。そんな子、いなかったわよ」

同行したK女史は、いぶかしげにいった。

私の潜在意識がでっちあげた幻の可能性もある。

しかし私は、外人のような少女の服装をK女史が「ああいうファッション、ゴスロリというのよ」と教えてくれたことを具体的に覚えている。しかし彼女は、そんなことを言った記憶はまったくない、単なる私の妄想だと言い張るのだった。「だって私、記憶力いいもん」

ちなみにこのゴスロリという言葉は、ゴシック・ロリータの略らしい。妙なファッションが流行るものだ。私の下意識は、同一人物を二人の存在として勝手に脚色したのかも知れない。

ひょっとしてあの少女は、あのままの姿で、ひっそりと放心したように、いつまでもいつまでも座り続けていたのでないかとも思う。

といったようなわけで、シビラEが何者なのか、いまだ不明なのである。

ただ、このまま蜻蛉の死骸のような文字が集積した生原稿を、事務所で発酵させておくのも寝覚めが悪いということで、とりあえずネット上で公表することになった。

『インキュナブラ』という作品が、それぞれに文体も異なり、まるで無骨な違法建築のように全体としてのまとまった構成がないのは、このように散発的に送られてきた背景からである。

――現在、K女史のボランティア作業によって打ち上がっている原稿は、

『忘れられない本』『二階のつきあたりの部屋』『干し首』『剥製』『砂場』『犬インフルエンザ』『液晶幽霊』『盲人植物園』などである。これらは不定期ながら順次アップされていく予定である。

(『忘れられない本』『二階のつきあたりの部屋』『犬インフルエンザ』は既に本サイトにおいて公開済みである。これはあくまでも仮説であるが、一人称で書かれた『忘れられない本』に出てくる主人公が、作者の肖像に最も近いと思われる)

最終的には「粹物語」「入れ子構造の物語」としての体裁を整え、全体の順序を整理して再掲載されるだろうが、流れや構成はまったくあてにできない。

もともと、それ自体で自己完結しているような挿話の並列という雑多な形体の文章群なのだ。あえて何かに喩えるならば、無意識的に自己増殖していくいびつな砂漠の蟻塚のようなものに、やや似ているかも知れない。

シェヘラザードは「千と一つの物語」を語り終えたあと、いつしかシャーリアール王の人間不信を癒し、三人の子供をもうけていたというが、『インキュナブラ』からは、とうていそんな人間的で温かな救済は期待できない。そもそも話し相手の洋市は、物語が理解できないらしいのである。これはディスコミュニケーションを基調とする暗い物語の森なのだ。つまりシビラEは、

語る目的不在の冷たい虚空に向かって、独り語り続けているのである。

こうした経緯から、われわれの原稿の保管が不適切だったために、ひとつひとつの独立した短編や掌編をばらばらに掲載することになってしまった。こんな代理人の「序」ではなく、「粹物語」の前提を占める作者本人による全体の「序」、「導入部」の原稿がどこかにあったはずなのだが、いまだに捜し出せてはいない。

それらは改めて全体の手書き原稿を整理した後、K女史によってきちんと文字データとして打ち直されてから公開できる形になるかと思う。

ちなみに、後で調べたところによると、「シビラ」とは古代ギリシャにおいて巫女、預言者を意味する言葉らしい。巫女は神聖なる娼婦でもあったという。たとえば有名なデルフォイ神殿の巫女などである。作者の自己妄想の一端が伺えるペンネームではあるようだ。

(『インキュナブラ』代理人Grasshouse

記す)

(シビラEによる『インキュナブラ』諸編の一編)

ある伝説的なアフリカの少数部族によれば、夜という現象は、光を食べる虫の習性により大気中の光量が減少することであり、昼という現象は、闇を食べる虫により、光の量が次第に増していく現象であると解釈される。

つまり彼らはこの世界を、「光」と「闇」の精霊にも似た、二種の神聖甲虫の闘争として捉えており、それは現世が善悪の闘争のコロッセウムと考える創造神話へと導かれてゆくのである。

しかしながら、世界を「光を食べる虫」「闇を食べる虫」との闘争として了解する彼らの世界観は、ひとつの比喩であり、寓話であり、背後に何らかの深い形而上学を隠し持っているのではないか——そう疑った識者も多い。

あるイスラエルの大脳生理学者は、メラトニンやセロトニンという脳内分泌物と、この少数部族の「光と闇」の闘争的世界観とを、パラレルに論じた奇妙な本をものしている。

さらに彼は、銀河系大宇宙と、小宇宙であるわれわれの脳との類縁性にも言及した。また、当然連想されるであろう、ゾロアスター教のアフラ・マズダとアーリマンの光と闇との戦いも、この特異な世界像に反映されていると指摘している。

「光を食べる虫・闇を食べる虫」の神話を継承するこの部族の名前は明らかにされていないが、おそらくは米国のアマチュア探検家ジョナサン・シルバースタインの著書『暗黒の中の燭光』や『アフリカ神智学』に出てくるジャン・ゴン族のことだと推察される。

この部族の小王国は、ナイル上流の切り立った渓谷を辿ってゆく密林の中の秘境にあるのだが、シルバースタインは白鬚を生やした片眼の最高長老との誓約により、正確な地理情報を公表しないことを条件として、その著書を刊行している。そのため他の研究者の検証ができにくい実情にあるのは、まことに不幸なことだ。

実際、彼の著書を精細に検証してみると、スーダンから、エチオピア、ウガンダまでビクトリア湖以北の広大な複数の秘境地帯を匂わせる一種の「陽動作戦」が採られており、彼の著書を手掛かりにして二番煎じを狙う野心家たちは、十中八九、命を失うことだろう。

米国の富豪一族のはねっ返り者であり、かつてカリフォルニアを放浪していたヒッピー上がりのシルバースタインを、大学の専門家たちは、道楽者のぼんぼん、誇大妄想のシロウト独学者扱いにしており、ことによったらアフリカ史を書き換えるかも知れない彼の実地調査と幾つかの重大な考古学的・文化人類学的発見を、長年のあいだ黙殺し続けてきた。

このジョナサン・シルバースタインなる人物であるが、幼い頃より、自身をその家系に属さない余計者と考えており、親族たちのように不動産業や金融業で名を馳せるよりも、この世の神秘を解明したいとの奇妙な欲望に突き動かされていた。とくに根っからの実利家肌のやり手経営者、幾つかの企業を支配していた著名なる父、ジェイコブ・シルバースタインとは、物心ついて以来

、不和が続いた。ジェイコブは鋭い目つきの自信家といった面構えであり、息子は対照的に、不安げな脅えるような眼をしていた。

ジョナサンは、かつてのカリフォルニア・ムーブメントに首を突っ込み、一頃は大麻や、薬物や、インド人グルのカルト宗教に溺れたものの、あることをきっかけに、そんな精神の沼地からすっかり足を洗った。いうまでもなく、ハリウッドを巻き込んだあの惨殺事件（編者註/チャールズ・マンソンらによるシャロン・テート事件のことか）のことである。

その後は、金にまかせて、アジアやアフリカ、中近東を放浪し歩き、さまざまな秘境調査に没頭してきたという。高価な稀覯本を買い集め、東西の神秘学や諸宗教の研究に耽溺した。

資金的には親の金の世話になっていながら、万事を金銭に還元する親族たちの考え方にはしごく批判的で、何かしら彼には、現実に対して居心地の悪さを感じているロマンチストの一面があったらしい。

残された写真を見ると、尖った鷹鼻をして、大きく青い目を見開き、どこことなく哲学者のウィトゲンシュタインを思わせる。ここには約束されていた輝かしいステイタスや、華やかな社交舞台から、あえて外れてしまった孤独な探究者の肖像が浮かび上がる。

大学のキャンパスでは、両手をだらんと垂らしたまま、夢遊病者のように頼りなげに歩く背の高い姿が、よく目撃された。

ちなみに、当時の同級生は、ジョナサンをまったく嘲笑的な口調で語る。

「何を考えているかわからない変人さ」

「人の目を真っ直ぐ見ないで、いつもおどおどしてた退屈なマザコン野郎」

「もちろん、おだてると金蔓にはなったさ。歩く財布だよ。それで付き合ってたんだ」

当時のガールフレンドの一人も、

「あのオランウータン、どうしてもあたしと寝たいらしく、一時つけまわされたの。しつこくて、何だか気味悪かったわ。友達も何人かあいつとやったらしいけど、最低だったって。みんな金めあてよ。当たり前じゃない」と言い放つ。

ジョナサンは、そのもって生まれた非社交的な性格から、次第に猜疑心が強くなっていった。二十代の前半には鬱病気味になり、精神科医の世話にもなったようだ。それを克服する自己治療の現れが、カリフォルニア行きであり、考古学であり、秘境探検なのであった。

さて、正統なアフリカ史には登場しないジャン・ゴン族であるが、最も注目すべきことは、この部族の高位の神官たちが、古代アレクサンドリアの図書館の一部文献と、『エメラルド・タブレット』の写本を隠匿しているとのシルバースタインの奇説である。

『エメラルド・タブレット』とは、かのヘルメス・トート、ヘルメス・トリスメギストス（三回生まれのヘルメス、三倍偉大なヘルメス）と称される人物が残したとされる古代文献だ。

ヘルメス・トートは、古代史の霧の地平の彼方に浮かび上がるほとんど神話的人物であり、かつて海に沈んだアトランティスから古代エジプトへと移住してきた賢者、先導者ともいわれる謎の存在である。この古代写本のありかを知っているのは、片眼のジャン・ゴン最高長老だけであり、次の世代の長老が即位するまで、決して口外されることはないのである。

彼らの世界観や、習俗、宗教儀礼が、ナイル上流域の洞窟から羊飼いによって発掘されたナグ・ハマディ文書や、コプト教、グノーシス派、カバラの象徴体系と部分的ながらも照応し、アフリカの未開民族というよりもむしろ、地中海文化圏、アレクサンドリア文化圏に属する高度な内容だとの解釈を、シルバースタインは自らのフィールドワークから導き出すことになる。

ジャン・ゴン族は、周辺部族に対して極めて排他的であり、決して他とは婚姻しようとはしない。かつてローマ帝国の横暴を怖れて、ナイル上流へと幾世代もかけて遡行していった彼らジャン・ゴンの血統に対する誇りは高く、遠く古代エジプトの王家や、シバの女王の末裔とされるエチオピア王朝とも繋がるというのだ。

ジャン・ゴンの部落では、長い間続いた近親相姦まがいの風習のため、多くの奇形の子供が生まれてきた。しかしそういった赤ん坊は、神官たちにより丁寧なイニシエーションの儀式を施された後、神の子として、ナイル上流へ注ぐ神聖な川に流されるのが一般である。

つまり、母なる自然の懷に帰されるのだ。彼らの靈魂は瀧壺に集まって天使のように浮遊し、その霧の中で生まれ変わって、虹の精霊と化す。最後にジャンゴン・デェヴィ、つまり部族の守護神として甦るといふ。

(ニューヨーク生まれのユダヤ系であるシルバースタインは、ここに旧約のモーゼの誕生説話を重ねているようだ。モーゼが赤ん坊の時に籠に入れられナイルの葦辺に流されたという逸話である。さらに、「瀧」の隠喩は、そのまま新プラトン派や、カバラにおける世界の流出論とも通底することになる。彼らにとって物質世界は、すべて、形なき光源としての神を表す比喩にすぎない)

周辺の素朴なアフリカ部族は、悪魔の山、幽鬼の谷といってジャン・ゴンの住む峡谷を忌み嫌っているが、実際のところは、お互いに差別しあっている状況であるらしい。これはしかし、潔癖なまでに周辺部族を蔑視して血をつないできたジャン・ゴン自身の宿命といわざるをえない。

普段、ジャン・ゴンの部族民は、岩に隠れた狭い台地を効率的に使い、焼き畑と狩猟を営んで生活する。険しい山岳地に、金塊を隠しているという噂もあるが、裏付けはない。神官たちは、迷宮のような洞窟内に、幾重にも柵を重ねたような回廊を作り上げ、そこに潜む。しかし、そこは原始的な洞窟というより、奥へ行くほどに地下宮殿といった方がふさわしくなると、シルバースタインは興奮の筆致で語る。

シルバースタイン著『暗黒の中の燭光』が明らかにしたところによると、ジャン・ゴン族の多くは、彫りの深い褐色のエチオピア系の顔立ちをしているが、最高位に属する数ファミリーは、明らかに地中海系の顔形をしており、中には白人系の肌を持つギリシャ・ローマ的な風貌の者すら見られるという。これはプトレマイオス朝以降のエジプト支配階級の一部が、そのような容貌であったことを連想させる。

ジャン・ゴン神話と古老の伝承に対する、彼の数年に渡る文化人類学的フィールドワークと、丹念な聞き取り調査によれば、一世紀に聖マルコがアレキサンドリアに伝道した際に、賢人オルムスとその弟子達を改宗させ、ジャン・ゴンにいまに伝わるアマルガム的な秘教ができたというのだ。

シルバースタインが世に問うた二番目の著作『アフリカ神智学』において、この世界観を「遙かナイル奥地に人知れず咲いた薔薇十字思想」と称している。

カエサル以来、すでに何度かローマによって侵攻されたアレクサンドリアであるが、その古代図書館が、四五世紀頃にキリスト教司教たちの陰謀によって完全に破壊される直前、その企てをあらかじめ察したエジプト神官達が、ひそかに膨大な書物と、併設の薬草園の貴重な植物を持ち去って逃げたという。それらの貴重な宝を、アフリカ奥地の岩窟修道院や、断崖の小洞窟に分散して隠匿したとの伝承が残されているのだ。

その神官の末裔と秘密の知識を伝承しているのが、まさしくジャン・ゴン族の族長ファミリーであり、その傍流である貴族階級や騎士階級――きわめて貧弱なものだが少数精鋭の剣士――であるという。（これらの特権的知識層には、当時アレキサンドリア図書館が抱えていた数多くの写字生、およびパピルス職人の末裔が含まれる）

とはいうものの、現在となっては、この隠匿された文献以外には、同様の知識を保管している書物文献類は、もはやバチカンの秘密地下書庫にしか存在しない。

しかも驚くべきことに、まったく通信手段もなく、世界情勢に疎いと思われるジャン・ゴン族の長老は、バチカンに対してもローマ・カトリックに対しても、怖しく否定的だ。いずれ期が熟した時には、コンスタンティヌス帝以来のバチカンの欺瞞的キリスト教神学を覆す、新たなる公会議、宗教裁判を企てる準備があるという。その反証となるような強力な古代文献を保管しているのではないかとの疑いがある。それがいわゆるシルバースタインのいう「アフリカに咲いた薔薇十字思想」との指摘になる。

そしてジャン・ゴンの崇拝する彼らの最高長老は、ヘルメス神秘学とエジプトの秘法によって覚醒しえた「第三の眼を使って、ここから何もかもお見通し」なのだという。とはいうものの、長老はもともと片眼であるから、肉眼一個と、額の奥の心眼により、世界を見通している寸法だ。

山羊鬚を生やした最高長老神官は、そのギロリとした片眼をむいて、モーゼのように杖を振り回しながら言い放つ。

「奴らは、イエスを裏切った！」

「金と魂を交換したパリサイの蝮のすえとは、ほかでもない、法王庁に巢食うあいつらのことだ」

しかしこの密林の危険思想を知ったことが、後になってまさにシルバースタインの悲劇を生むことになるのは皮肉なことである。この探検家は、決して洩らしてはいけない秘密を、自著『アフリカ神智学』の中で活字化し、公開してしまったのである。

とくに重大な過失は、この全カトリックを敵に回すアフリカ発の新たな宗教改革計画の公表と、偽書として葬られている『エメラルド・タブレット』写本のありかがどうやらxxx溪谷の****洞窟群であるらしいという情報である。

この知られざる溪谷は、乾季を迎えると瀧の水量が少なくなり、わずか三日間だけ、滝壺の上にある暗い洞窟の入口が開くのである。

もしこの写本が公になったら、古代エジプト密教と、原始キリスト教、そしてグノーシス派とユ

ダヤ思想の共通母胎があきらかとなり、数千年の宗教思想史に一本の強靱な軸が真っ直ぐに通り、西欧精神史の根底的な書き換えが迫られるかも知れない。

かつての『死海文書』や『ユダ福音書』の発見以上の騒ぎになるはずだ。ナショナル・ジオグラフィックも放ってはおかないだろう。アフリカの秘境の洞窟は、とんだ時限爆弾を抱えていたものだ。とはいえ、ここまで聞き取り調査するまで、シルバースタインは膨大な金品と長老に対する涙ぐましい儀礼を払ったらしい。

しかしながら、シルバースタインの著作の中で感動的な場面は、やはり「光の木」「闇の木」を実際に目撃するシーンであろう。

彼はまだ明け方にもならぬ時刻に、神官たちに目隠しをされたまま、まる一日歩かされた。

やっと道がなだらかになり、ある谷間に出た。そこで不意に、目隠しを外された。

目の前には、薄紫色に霞む花園のような絵画的風景が広がり、ここが「アレクサンドリア薬草園」だと教えられた。渓谷は淡いブルーの輝きを帯びた秀麗な山々に囲まれていた。かのエジプトの地から、先祖たちが命からがら種を持ち抱えてきた貴重な植物の園であった。

花壇の一画の岩でできた灰白色の四阿のようなところで、何かコーヒー色のまずくて濃い異様な液体を飲まされると、ジョナサンは頭がぼーとなった。

美しい景色の中で、次第に不安がつのった。

激しい疲労の中で、野心と後悔がないまぜになったような複雑な感慨を覚えた。

「ああ、ママ。俺はここで殺されるかも知れない。なんて親不孝な人生なんだ」

そして自分がはるばるこんな暗黒大陸の奥地にまでやってきたのは、まさに厳格な実利家肌の父から、できるだけ遠ざかりたい一念であったことに気がついた。

しかし、コーヒー色の薬物は毒殺目的ではなかった。むしろ過酷な岩山歩きのための滋養強壯を狙ったアレクサンドリア式の貴重な煎じ薬だったようだ。ひょっとしたら、単にまずいだけの本物のコーヒーだったかも知れない。

いまだふらふらしているにもかかわらず、彼は再び目隠しをされて、神官たちにせつつかれ、つづら折りのようにうねり狂ったな岩階段を、さらに何時間も上下した。

何度か転んで、腰や背中をしたたか打った。

突如頭から、膨大な水量を浴びた。

瀧だった。

まるで暴力的な物体のような水の塊。怒濤のような水圧で、頭や肩の骨が壊されそうになり、ほとんど死ぬかと思われた。しかし案内者たちにようやく背中を支えられ、やっとのことで岩場が上がった。

ぬるぬるした堅固な岩場で這いつくばったジョナサンは、目の蒼黒く翳る洞窟の中から、おいおいでをするような樹木の無骨な枝が、額に触れようとしていることに気がついた。

洞窟の周囲にあふれ出すように根を張っている奇怪な巨木を、いま目前にしていたのだ。

しかし滝壺からわきたつ霧の遠近法で、はっきりとは判別しがたい。

視界が広がってくるに従い、そこに祭壇のごとく控えていたのは、何か見たこともない灰色の蝟のような樹木で、ガジュマロと縄文杉（実際に著書では、この日本語が使われている）を足して二で割ったら、こんな怪物ができあがるという代物であった。

前方に進み、巨大な蝟の交尾のような全体像が見えてきてわかったことだが、それは煉獄を思わせる洞窟内に何千年もはびこった雌雄の双樹で、「エグレガレム」と称される奥ナイル山岳地の固有種であり、しかも外側が「光の木」、内側の影になった木が「闇の木」という、樹齢の判定も不可能な聖木だということであった。

この双樹をあわせて、彼らは「生命の木」と称していた。

無数の重なり合った灰色の象皮のような樹肌には、ヒエログリフのような古代文字が刻まれて、剥げ落ちた金箔の跡がかすかに認められたという。

「そのとき私は、自分がヒエロニムス・ボッシュの絵画世界にでも迷い込んでしまったのではないかと思ったものである」（『アフリカ神智学』）

エグレガレムの蔓や枝や根のはびこる彩色曼荼羅図のような薄暗い洞窟内には、あちらこちらから、灰色の鬚のような縄梯子が、だらしもなく垂れ下がっていた。

狭い階段を恐る恐る下りてゆき、指示された通りに空中の踊り場になったような岩場で瞑想に入ると、太陽はやがて傾き、得体の知れない巨樹が、ゆっくりと下層から翳っていった。

褐色とも紫ともつかないゴシック聖堂のような自然洞窟、その内部にうがたれた無数の穴を透かし、奇跡のように澄みきった外光が斜めに入りこむ。古くて荒れ果てた厚い樹皮を、ひかりは蒼紫から桃色へ、そして黄金色からまばゆいオパール色へと斑模様染めてゆく。あちこちの岩の窪みに溜まった水がひかりを反射し、ゆらめきながら怪物の咽喉めいた天井へとその明るみを放つ。その光景は、中世期の素晴らしいステンドグラスの薔薇窓のように思われた。

この光のパイプオルガンによる荘厳なる視覚の音楽、虹色の光線を操る J.S.バッハともいうべき壮麗な情景に、探検家は慄然として、背筋が伸びる思いがした。

ふとそのとき、ジョナサンは、何やら蝙蝠のようなものが、あるいは虫のようなものが、巨大樹エグレガレムの城壁のような幹を、ぞわぞわと二列に上下しているのに気がついた。まるで静脈流と動脈流のような生命の流れ。これが光の虫、闇の虫というものなのか。

しかし案内役の神官は声を低め、これらは死者の魂だと告げた。光の虫も、闇の虫も、量子化した人魂の現れなのだ。それは神聖甲虫スカラベが二極に分化したものであり、人間の魂こそが、光を食べ、また、闇を食べるのである。それは聖性と魔性であり、かつまた、存在と虚空との間で輪廻を繰り返す、光と闇の曼荼羅であり、明知と無明の複雑な織物なのであった。

一昼夜を、ジョナサンはそこで過ごした。

鈍いこてこての鉛色にひかる平たげな岩に、ヨーガのポーズで、彼は座った。

「光の木」が巨象の腹のような根元から、ゆっくりと暗くなっていく壮大な光景と、暁を迎え

て「闇の木」が前方から明るくなっていく憂愁に満ちた光景に、うっとりで見惚れた。

すべては隠喩ではなく、実在なのであった。

同時にそれは、生命の木と、世界流出を表すひとつの象徴であるらしい。

ジャン・ゴン神官たちは、日の出とともに厳かに朗読を始めた。獣の脂で作った千本もの蠟燭が、ゆらゆらと闇を照らしていた。グレゴリオ聖歌よりも壮重な調べ。それは古代のアレクサンドリアから伝わる高貴な声明の類らしい。

「私はこれまで、どのような宗教儀式においても、このように神秘的、かつ壮麗な情景を目撃したことはなかった。ユダヤ教のシナゴグにおいても、カトリックの聖堂においても。しかし私は、あえて仮説としてここに言うのだが、この背景にあるのは、おそらくはカバラである」

専門家たちは、富豪のどら息子の探検家、道楽的なアマチュア文化人類学者であるシルバースタインの説に対して、手厳しく批判した。

「生命の木」と「智恵の木」、そして「光の木」と「闇の木」をごっちゃにしていると批判する。しかもカバラの発生は、ローマ帝国によるアレクサンドリアの侵攻よりもずっと後の時代だと指摘する。

しかしシルバースタインは、このようなシンクレティズム（諸宗教の折衷）はどんな高度な宗教文化にも見られることであり、世界観の混在をもってひとつの民族文化を否定することは単略に過ぎると反論する。またカバラ発生の時代的矛盾についても、ひとつの思想が書物として書き表される以前、師から弟子へと秘かに口伝として継承される傾向にあることを強調した。さらに彼は、聖樹エグレガレムと、ユダヤ思想のエグレガーレ（集合魂）との類似音を指摘している。

.....残念ながらここで、シルバースタインの最期についてふれなければならない。

彼が幾度かのフィールドワークを経て米国に帰り出版した書物の中に、最高長老との契約に触れる箇所があった。彼は長老を父親とも慕い、かの部族を愛してはいたものの、遠くアフリカの地を離れ、自著の出版にかまけている間、事をいささか安易に考え過ぎていたのかも知れない。

欧米にひそかに飼っている秘密のネットワークを通じてか、「第三の眼を通して、ここから何もかもお見通し」の最高長老の千里眼を用いてか、神秘的な双樹と『エメラルド・タブレット』のありかを匂わせる記述を盛り込んだ書物は、部族の識者によって厳格に検閲された。

そして、ニューヨークから遠く離れた緑の密林で、厳しい欠席裁判が行われた。血で書かれた誓約書はいまだ生きており、これはすでに死に値する渾身の行為であった。

事態の進行を知らないジョナサンが、二年後訪れた時には、前よりもいっそう歓迎された。

しかしそれは儀礼的な演出であり、定められた死へと向けられた儀式なのであった。珍味のくだもので作った極上の果実酒や、とろりとした椰子酒をふるまわれた。

奇妙なことに、父とも慕っていた片眼の最高長老は、今回は会ってはいくれなかった。ジョナサンに、思い当たることがなかったわけではない。しかし話せばわかってくれると彼は甘く考えた。

二人の美しい肉感的な褐色の娘たちをあてがわれた。蓮の葉を重ねたような鍾乳石のプールや、小さな瀧のある洞窟内で、酩酊状態の彼女たちと、一晩中裸でじゃれ合い、我を忘れて明け方

までを過ごした。

悪い気はしなかった。

ここはすでに彼の桃源郷であった。この人生を長い間呪っていたジョナサンであるが、秘境という魂の居場所を見出すことで、やっと世界と和解できるような気がした。

自分の発見は、いずれ世界史を書き換えるだろうと思うと、満天の星がひとときわ燦然と輝いて見えた。

――気がついた時にはすでにジョナサンは、「光の木」「闇の木」の麻のハンモックに縦に吊り下げられていた。ほとんど、蓑虫状態であった。

手足は蜘蛛の糸に絡め取られたように虚しくもがくだけであり、体の痛みは耐え難いほど激しくなる。空腹を訴えても、下っ端の言葉の通じない若い監視役が、槍を振り上げて、不思議そうに見上げるばかりであった。

洞窟の穴から差し込む黄色い光線が、淡く彼の上方に差し込んでいた。深い疲労と痛みの中、ニューヨークのくすんだ裏町や、子供の頃に遊んだロングアイランドの白い浜辺や、ノスタルジックな灯台の風景が、夢のように目蓋に浮かんだ。

何度か神官たちが厳かに祈禱するのを、苦しい幻覚のなかで感じた。

意識が戻ると、ぞわぞわと何かかが這い上がってくる。それは無数の蛍のように思われた。

光の虫が、もはや幽鬼の影となってしまった彼の罪深い肉体を、脚の方から蚕の幼虫のように食べ始めていた。

「許してママ！ もう一度、ママの作ったホットケーキが、食べたい……」

ちょうど夏至の太陽が、古代において緻密に設計された窓穴から差し込み、彼の顔面を焼きつけるように照らしたとき、ジョナサン・シルバースタインは、ひっそりと息絶えた。享年四十四歳であった。

ジョナサンの首は、砦のような高台に突き立てられたY字型の太い木に架けられ、何日何日も、アフリカの烈風や、強い日光にあぶられ、詩的な深いオリーブ色を帯びていった。

すでに頭蓋骨を抜かれ、ほとんど半分ほどに縮まってはいたものの、それはこの世の真実を解き明かそうと地平線を睨む、哲学者の風貌を思わせた。特殊な薬草に浸けられていたので、禿鷹すらも寄ってこない。

天空を飛び行く雲影に染められ、台地を吹き抜ける強風にあおられ、さらにその造型は峻厳になった。これならば欧米の名の知れたコレクターでも、大枚を叩いても購入したがる芸術的美品である。

干し首として完成すると、シルバースタインの頭部は、すでに「光の木」の梢に掲げられ、光によって聖化された。これは部族の秘密を外部に漏らした贖罪なのであるが、ジャンゴンの世界観によれば、闇は光を生み、光は闇を生むということになり、善悪は究極的には一元化される。

彼は部族の歴史の中で聖列されたのである。

秘境との密貿易をなりわいとする者たちによれば、最終的な完成形としての「首」は、目と、

口と、鼻と、耳には、大型のエメラルドが埋め込まれ、燦然と輝いていたという。この「頭部だけのミイラ」は、複数の感覚器官を封じることにより、死者の魂は地上への執着を離れ、虚空へと転化するという。これはほとんど仏教やヒンズー哲学を思わせる。

干し首は、その後、内部から緑色の光を放ついびつな惑星のように、あの巨怪な「光と闇の木」の入口を彩っていたという。この世で居場所がなかった彼の魂は、やっと安住の地を見出した。このような結末は西欧的価値観においては悲劇ではあるが、考えようによっては、探検家冥利につきるともいえる。たとえば動物学者がライオンに食われるようなものであろう。

しかし、娘であり秘書でもあったサラ・シルバースタイン（彼がヒッピー時代に、カナダ女との間に生まれた娘である）によれば、あの事件の真相は、バチカンの放ったイエズス会の黒人工員によって、峡谷に無数にある洞窟内で自分の父親は惨殺されたのであり、ジャン・ゴン神官達による干し首製造は、その結果処理としての宗教儀式にすぎないという。

しかも本物のジョナサンの干し首は、密貿易の船によって秘かに運ばれ、地中海に浮かぶある孤島において、欧米エリート結社の催す極秘の黒魔術に使われているというのだ。むろんサラはたちまち、ニューヨーク社交界で、狂人扱いとなった。

アメリカの富豪一族には、元ニューヨーク知事のネルソン・ロックフェラーの跡取り息子でありながら、ニューギニア首狩り族の犠牲になったとされる探検家のマイケル・ロックフェラーがいる。シルバースタインの悲話はこの著名人ほど知られてはいないが、人類の影の歴史に対する意味合いとなると優るとも劣らない意義がある。

シルバースタインは、中世の幻の英雄プレスター・ジョンについても、ジャン・ゴンとの関係性を匂わせている。回教徒と苦戦する十字軍の危機を救うために、強大な援軍を率いて大地の彼方から現れるという、アフリカ奥地のキリスト教国の騎士王プレスター・ジョンの伝説である。

これが実はジャン・ゴン最高神官のことだと彼は主張するのだが、さすがに根拠に乏しく、専門家の中でこの荒唐無稽に過ぎる説を支持する者は、いまだ皆無である。

干し首（了）

『インキュナブラ』諸編より抜

粹

インキュナブラ

<http://p.booklog.jp/book/42058>

著者 : Grasshouse

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/grasshouse/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/42058>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/42058>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.